オー

白鷗号航海記

栗原景太郎

白鷗号航海記

栗原景太郎

文藝春秋

栗原景太郎（くりはら　けいたろう）
1942年3月　東京に生まれる。
1961年4月　神戸商船大学航海学科に入学。在学中はヨット部員として活躍。
1966年2月　卒業後川崎汽船に入社。世界一周の願望やみがたく、2年後に退社。
1969年5月5日　江ノ島を出航、1年4ヵ月にわたる世界一周の航海をはたして帰還した。
〈現住所〉鎌倉市坂ノ下1　ビューパレス512
TEL (0467)23・0133

白鷗号航海記

昭和45年12月1日　第1刷
昭和46年4月20日　第2刷
定価 500円

著者　栗原景太郎
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3　郵便番号102
電話・東京 (03) 265－1211（大代表）

印刷　大日本印刷
製本　中島製本

© 1970 Keitaro Kurihara
Printed in Japan
万一落丁乱丁の際にはお取替いたします

0026-331690-7384

真の蘇生への道

石原慎太郎

この航海日誌は一つの充ち足りた青春の航跡である。

海に魅かれる青年は、知らずに陸を嫌い、陸の上の生活に喪われつつあるものを海に探し求めているのだ。それは人間の真の勇気であり、友情であり、人間の自然に対する憧憬であり安らぎであり、或いは厳しい自然の間で確認される人間の尊厳でもある。

陸を去り、海に出ることは逃避ではなく、それこそが手応えある追求であり、彼らにとっての真の蘇生への道に他ならない。

白鷗号の航跡を文字でたどりながら、海に魅かれる人間の一人として、私は新しい共感を感じる。

そしてもうひとつ、今まで日本で評判になったヨットの航海者たちの、一、二の例外をのぞいて、率直にいって十全とはいえぬ技量に比べて、白鷗号の乗組員たちのシーマンシップは専門的に眺めても完璧であり、それ故彼らの冒険は冒険の危うさを感じさせぬ程確かに遂行され、そしてそれ故にそれは完璧な冒険であった。

パタゴニヤの氷河が落下するマゼランの海へ、突風に襲われながらも進んでいく船の上で彼らが感じた孤独と不安も、そしてそれ故の充実こそ、いかなる贅沢にも勝る贅沢であり、それこそが青春のまがいない記念碑に他なるまい。

マゼラン海峡を通らずに世界一周をするなら、死んだ方がいいと叫ぶ彼らの好奇心と気負いこそ、実は人間の始原的な特質であり、それを敢行することで、若ものは若ものたり得、青春は青春たり得るのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

真の蘇生への道……石原慎太郎

第一章　なせば成る……11

サイは投げられた　日本男児の心意気　神戸商船大学に入学　シゴキのヨット部　三人の紳士協定　猛反対する家族　白瀬さんの登場　出航前の二十日間

第二章　小笠原のタコ騒動……39

襲いかかる三角波　白鷗号と命名　モヤの中の小笠原　父島までは練習航海　サイパン島に黙禱

第三章　豪華な赤道祭り……59

目標はマゼラン海峡　凪とスコールと酷暑　マストに雷が落ちる　帆走か、機走か　セラム海に出没する海賊　星由里子に〝再会〟

第四章　インド洋上の誓い……81

イルカの群れに包囲　糞尿あふれる海　バリ島のバナナ　「水を使いすぎた」　頭上に燃える南十字星　日本式風呂で汗を流す

第五章　喜望峰の華麗なる虹……105

気になる他人の欠点　日本恋しや、懐しや　暗闇にアフリカの灯が　不退転の決意をもって　不愉快な人種差別　ポートエリザベスに避難　午後五時一分喜望峰通過

第六章　不毛の島セントヘレナ……135
南アの農協さん　マゼラン海峡への不安　韓国船からのプレゼント　苔むすナポレオンの墓
第七章　南米パンパスの休日……153
サメのいる海中へ　バーボンで酒盛り　炸裂する雷の直撃　六カ月ぶりの両親の声　パスポートが盗まれた　私だけが生き残ったら　サンバからタンゴの国へ　アディオス、白瀬さん　前途は荒涼たる海と空
第八章　マゼラン海峡に挑む……185

来たぞ、処女岬だ　突然、強烈な西風が　海の中を流れる川　滝のある入江に避難　悪相の漁師たち　虹のむこうに大氷河　ウィリーウォー来襲す　沈船とトドと星と　日航機乗っ取りを知る　インディオ、わが兄弟分　逃げまどう軍艦　波高い太平洋へ

第九章　長い暑い一万マイル……237

チリの情熱的な美人　海底火山の爆発か　極限状態の異常心理　緑青入りの飲用水

第十章　白鷗よ　あれが八丈だ……253

底をついてきた食料品　お前とは絶交だー　深夜、日本の土を踏む

あとがき……268

装幀　横山明

題字　河内雪峰

本文イラストレーション　谷井建三

地図　浅沼登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

白鷗号航海記

なせば成る　なさねば成らぬ　成る業を
成さぬと捨つる　人のはかなさ

——武田　信玄

第一章　なせば成る

サイは投げられた

昭和四十四年五月五日――。陽光はなんという眩しさだろう。空も海もなんという光り輝く青さだろう。この記念すべき日の朝を僕はある種の感動をもって迎えた。

この一週間というもの、搭載品の積みこみ、チェックに追われて、満足に睡眠もとっていないというのに、この心身の充実ぶりは自分でも理解できない。世にいう躁状態にあるのだろうか。

せっかくのおふくろ心尽しの朝食もほどほどにお茶だけをガブッと一息に飲みこんで、鎌倉の自宅を出、わが白鷗号のもやってある江ノ島ヨット・ハーバーに急いだ。

さわやかな五月の微風がハーバーの海面をよぎり、僕たちのきびしい航海に祝福を与えてく

れるかのようだ。僕たち、というのは、僕と武田治郎、それに白瀬京子さん、この三人である。僕が一応、艇長ということになっている。武田は機関長、白瀬さんはコック長という役割だ。

晴れの出港を前に、白鷗号の甲板を埠頭の水道できれいに洗い、ついでに各ウインチの金具類をピカピカにみがきたてる。少しでもこざっぱりした姿で船出しようと、午前中はもっぱら艇の清掃に時間をついやした。

時計の針が正午をまわる。刻々、船出の時刻がせまってきた。恋人をはじめ、肉親や友人など、大勢の見送りの人たちと記念写真をとり、最後の挨拶をかわす。

正一時、乗船。これでもう、あとまず一年半は日本の土を踏むことはない。

エンジンをスタンバイ、左手で舵のロープを握って、武田に、

「もやい、レッコ（レッツ・ゴー）」

と、号令をかける。同時に、僕の左手からもロープが離れた。

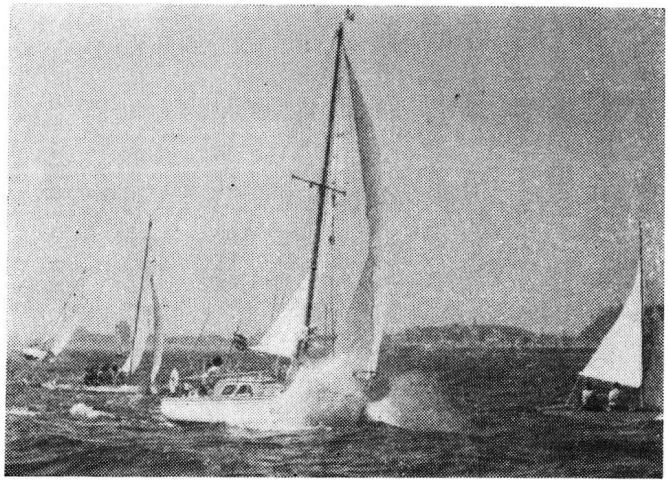
「行ってらっしゃい！」

「がんばれよ、無茶するな」

「元気でな！　手紙をくれよ」

見送りの人たちが口々に大声で叫ぶ。

エンジンを始動した。調子よく、一発でかかる。



セイルいっぱいに風をはらみ江ノ島を出航する白鷗号

ドンドンドン……。白鷗号は、ディ！ゼル・エンジン特有の機関音をたてながら、ゆっくり埠頭を離れた。

――お父さん、お母さん、心配無用です。世界一周を果して、元気な姿で日本に帰ってきます。もう、二度と親不孝なことはいたしません。

埠頭で手を振りつづける両親の姿にむかって、僕は心の中で叫んだ。

併走するヨット仲間の艇が、一つ一つ、励ましの言葉をかけて、後方に去っていった。

エンジン機走から帆走に切りかえ、セイルをセットする。クローズ・ホールド（風に向って走る航法）なので、波しぶきがすごい。

鎌倉の腰越のあたりだろうか、民家の屋根で、鯉ノボリがのんびりと泳いでいるのが見える。その鯉ノボリが、しだいに遠く背後のものにな

ってゆく。そして、やがてモヤのなかにとけこんでいった。街も、林も、村も、山も……。

――さらば日本！　さらば故郷！

矢は放たれたのだ。多くの困難をはらみつつ、僕たちの〝賭け〟は、サルトル流にいえば「なされてしまった」。あとは成功をめざして遮二無二全力をつくすのみである。

日本男児の心意気

……ヨットによる世界一周。これを、僕たちはやろうというのである。

もちろん、この航海がなまやさしいものでないことは、百も承知だ。とくにそのコース中、大西洋と太平洋を結ぶマゼラン海峡は、いまだ〝秘境〟の部類に属している。ここをヨットで無事横断に成功した者は、世界でも五本の指をもって数え得るほどしかいない。一九六六年、ハワイのアワニー号が成功したのを最後に、この一、二年でオーストラリアとノルウェーのヨットが挑戦し、いずれも失敗している。文献で調べてみても、命がけでかからないと、通過できそうもない難所であるらしい。

かてて加えて、僕たちのパーティは、男性二人に女性一人と、いかにも特殊である。

つまり、この航海は、第一に生命の危険をはらみ、第二に人間関係の問題をかかえているわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co